猫の草紙

楠山正雄

一

むかし、むかし、京都の町でねずみがたいそうあばれて、困ったことがありました。台所や戸棚の食べ物を盗み出すどころか、戸障子をかじったり、たんすに穴をあけて、着物をかみさいたり、夜も昼も天井うらやお座敷の隅をかけずりまわったりして、それはひどいいたずらのしほうだいをしていました。

そこでたまらなくなって、ある時お上からおふれが出て、方々のうちの飼い猫の首ったまにつないだ綱をといて、放してやること、それをしない者は罰をうけ

ることになりました。それまではどこでも猫に綱をつけて、うちの中に入れて、かつ節のごはんを食べさせて、だいじにして飼っておいたのです。それで猫が自由にかけまわってねずみを取るということがありませんでしたから、とうとうねずみがそんな風に、たれはばからずあばれ出すようになったのでした。

けれどもおふれが出て、猫の綱がとけますと、方々の三毛も、ぶちも、黒も、白も自由になったので、それこそ大喜びで、都の町中をおもしろ半分かけまわりました。どこへ行ってもそれはおびただしい猫で、世の中はまったく猫の世界になったようでした。

こうなると弱ったのはねずみです。きのうまで世の中をわが物顔にふるまって、かって気ままなまねをしていた代わりに、こんどは一日暗い穴の中に引っ込んだまま、ちょいとでも外へ顔を出すと、もうそこには猫が鋭い爪をといでいました。夜もうっかり流しの下や、台所の隅に食べ物をあさりに出ると、暗やみに目が光っていて、どんな目にあうか分からなくなりました。

二

「これではとてもやりきれない。かつえ死に死ぬほかなくなる。今のうちにどうかして猫をふせぐ相談をしなければならない。」というので、ある晩ねずみ仲間が残らずお寺の本堂の縁の下に集まって、会議を開きました。

その時、中でいちばん年を取ったごま塩ねずみが、一段高い段の上につっ立ち上がって、

「みなさん、じつに情けない世の中になりました。元来猫はあわび貝の中のかつ節飯か汁かけ飯を食べて生きていればいいはずのものであるのに、われわれを取って食べるというのは何事でしょう。このまますて

ておけば、今にこの世の中にねずみの種は尽きてしまうことになるのです。いったいどうしたらいいでしょう。」

すると元気のよさそうな一ぴきの若いねずみが立ち上がって、

「かまわないから、猫の寝ているすきをねらって、いきなりのど笛に食いついてやりましょう。」

と言いました。

みんなは「さんせいだ。」というような顔をしましたが、さてだれ一人進んで猫に向かっていこうというものはありませんでした。

するとまた一ぴき背中のまがったねずみがぶしょうらしく座ったまま、のろのろした声で、

「そんなことを言っても猫にはかなわないよ。それよりかあきらめて、田舎へ行って野ねずみになって、気楽に暮らしたほうがましだ。」

と言いました。

なるほど田舎へ行って野ねずみになって、木の根やきび殻をかじって暮らすのは気楽にちがいありませんが、これまでさんざん都でおいしいものを食べて、おもしろい思いをしたあとでは、さてなかなかその決心もつきませんでした。

そこでいちばんおしまいに、中でもふんべつのありそうな頭の白いねずみが立ち上がりました。そして落ちついた調子で、

「まあ何かというよりも、もう一度人間に頼んで、猫をつないでもらうことにしたらいいだろう。」

と言いました。

するとみんなが声を合わせて、

「そうだ。そうだ。それに限る。」

と言いました。

そこで議長のごま塩ねずみが仲間からえらばれて、ここのお寺の和尚さんの所へ行って、もう一度猫に

綱をつけてもらうように頼みに行く役を引き受けることになりました。ごま塩ねずみはさっそく本堂へ上がって、和尚さんのお居間までそっとしのんでいって、

「和尚さま、和尚さま、お願いでございます。」

と言いました。

和尚さんはおどろいて、目をさまして、

「おお、だれかと思ったらねずみか。その願いというのは何だな。」

「はい、和尚さまも御存じのとおり、このごろお上のお言いつけで、都の猫が残らず放し飼いになりましたので、罪のないわたくしどもの仲間で、毎日、毎晩、

猫の鋭い爪さきにかかって命を落とすものが、どのくらいありますかわかりません。もう一日食べ物の無い穴の中に引っ込んだまま、おなかをへらして死ぬか、外に出て猫に食われるか、ほかにどうしようもございません。和尚さま、どうかおじひにもう一度猫をうちの中につなぐようにお上へお願い申し上げて下さいまし。今日はそのお願いに上がったのでございます。」とねずみは言って、殊勝らしく手を合わせて、和尚さんをおがみました。

和尚さんはしばらく考えていましたが、

「なるほど、そう聞くと気の毒だが、お前の方にもい

ろいろ悪いことがあるよ。まあ、お前たちも人のすてたものや、そこらにこぼれた物を拾って食べていればいいのだが、これまでのように、夜昼かまわず、人のうちの中をかけまわって盗み食いをしたり、着物を食いやぶったり、さんざん悪いいたずらばかりしておきながら、今更猫に苦しめられるといって泣き言を言いに来ても、それは自業自得というもので、わたしにだってどうしてもやられないよ。」

こう言われて、ごま塩ねずみもがっかりして、すごすご帰っていきました。

もとの縁の下へ帰って来てみますと、じいさんねず

みも、若ねずみも、大ねずみも、小ねずみもみんなさっきのままで、首を長くして、ひげを立てて、ごま塩ねずみが今帰るか、今帰るかと待ちかねていました。けれどもごま塩ねずみがしおしおと、和尚さんに会ってことわられた話をしますと、みんなはいっそうがっかりして、またわいわい、いつまでもまとまらない相談をはじめました。そのうちに夜が明けてしまったので、こんなに大ぜい集まっているところをうっかり猫に見つけられては、それこそたいへんだといって、

「じゃあ、あすの晩もう一度和尚さんの所へみんなで行って、頼むことにしよう。」

とそれだけきめて、またこそこそとてんでんの穴（あな）の中に別（わか）れて帰（かえ）っていきました。

三

すると猫（ねこ）の方（ほう）でももうさっそくに、きのうねずみが和尚（おしょう）さんの所（ところ）へ頼（たの）みに言（い）ったことを聞（き）きつけて、「これはすてておかれない。」というので、町（まち）はずれの原（はら）に大（おお）ぜい集（あつ）まって相談（そうだん）をはじめました。

その時（とき）まず、その中で年（とし）を取（と）った白猫（しろねこ）が一段高（いちだんたか）い石（いし）の上に立（た）ち上（あ）がって、

「みなさん、聞くところによりますと、こんどわたしたちが放し飼いになったについて、ねずみどもがたいそう困って、昨晩お寺の和尚さんの所へ行って、もう一度わたしたちをつないでくれるように頼んだということであります。これはじつにけしからん話で、ぜんたいねずみは猫の食い物と大昔から神さまがおきめになったのです。その上ねずみはあのとおり悪さをして、人間にめいわくをかける悪いやつです。万一ねずみのいうことが取り上げられて、せっかく自由になったわれわれが、またもとの窮屈な身分に追い込まれるようなことがあってはたいへんです。さっそく

和尚さんの所へ行って、あくまでそんなことのないようにしてもらわなければなりません。」

こう言うとみんなは声をそろえて、

「賛成、賛成。さあ、ではすぐ白のおじいさんに、行ってもらうことにしましょう。」

と言いました。そこで白は一同の代わりになって、和尚さんの所へ出かけていきました。

「和尚さま、聞きますとゆうべねずみがこちらへ上がって、わたくしどもの悪口を申したそうですね。どうもけしからん話でございます。ねずみというやつは、人間の中で申せばどろぼうにあたるやつで、じひ

をおかけになればなるほどよけい悪いことをいたします。もしねずみの言うことをお取り上げになって、わたくしどもがまたつながれるようなことになりますと、いよいよやつらは図に乗って、どんなひどいいたずらをするかわかりません。それとは違って、猫はもと天竺の虎の子孫でございますが、日本は、小さなやさしい国柄ですから、この国に住みつくといっしょに、このとおり小さなやさしい獣になったのでございます。しかし一度ほんとうにおこって、元の虎の本性に返りますと、どんな獣でも恐れません。それ故こんどお上からおふれが出て、放し飼いになったのを

幸い、さしあたりねずみどもを手はじめに、人間にあだをする獣を片っぱしから退治するつもりでいるのです。」

と言いました。

和尚さんは猫のこうまんらしく述べ立てる口上を、にこにこして聞きながら、

「うん、うん、それはお前の言うとおりだとも。だからねずみの言うことは取り上げずに帰してやったのだから、安心おしなさい。」

と言いました。

そこで猫はすっかりとくいになって、尾をふり立て

ながら、みんなが首を長くして待っている所へ行って、

「みなさん、大丈夫、和尚さんは承知してくれました。」

と言いました。

するとみんなは口々に「万歳、万歳。これで安心だ。」

と言って、手をつなぎ合って、猫じゃ猫じゃを踊りました。

するとまたこの話を聞いたねずみ仲間では、

「猫のやつが和尚さんの所へ頼みに行ったそうだ。」

「和尚さんは猫に、ねずみの言うことは決して取り上げないと約束をなさったそうだ。」

「何でも猫は天竺の虎の子孫で、人間のために世界中

の悪い獣を退治するんだといばっていたそうだ。」

てんでん、こんなことを口々にわいわい言いながら、またお寺の縁の下で会議を開きました。けれどもべつだん変わったいい知恵も出ません。

「もうこの上和尚さんに頼んでみたところで、とてもむだだから、今夜みんなでそろって和尚さんの所へ行くことはよそう。そして夜の明けないうちに、いよいよ都落ちをして、田舎へ行くことにしよう。」

だれが言い出すともなく、年を取ったねずみたちの間にはこの話がまとまって、みんなはあわてて夜逃げのしたくにかかりました。

するとまた元気のいい若ねずみたちが、くやしがって、
「まあ待って下さい。われわれはただの一度も戦争らしい戦争をしないで、むざむざ都を敵に明け渡して田舎へ逃げるというのは、いかにもふがいない話ではありませんか。それでは命だけはぶじに助かっても、この後長く獣仲間の笑われものになって、まんぞくなつきあいもできなくなります。そんなはずかしい目にあうよりも、のるか、そるか、ここでいちばん死にもの狂いに猫と戦って、うまく勝てば、もうこれからは世の中に何もこわいものはない、天井裏だろうが、

台所だろうが、壁の隅だろうが、天下はれてわれわれの領分になるし、負けたら潔くまくらを並べて死ぬばかりです。」

と言って、またくやしそうにきいきい歯ぎしりをしました。

その勢いがあんまり勇ましかったものですから、逃げ腰になっていた外のねずみたちも、ついうかうかつり込まれて、

「そうだ、それがいい、それがいい。」

「なあに、猫なんかちっともこわくないぞ。」

とこんどは急に力み返りながら、いよいよ戦争の

したくにとりかかりました。

すると猫の方でもすばやくそれを聞きつけて、

「何を、ねずみのくせに生意気なやつだ。」

「よし、残らずかかって来い。一ぺんにみんな食い殺してやるから。」

と急に爪をとぐやら、牙をこするやら、負けずに戦争のしたくをして、

「おもしろい。おもしろい。ねずみのやつ、早く寄せて来ればいい。」

と待ちかまえていました。

四

いよいよしたくができて、勢揃いがすむと、ねずみ仲間は、親ねずみ、子ねずみ、じじいねずみ、ばばあねずみ、おじさんねずみ、おばさんねずみ、お婿さんねずみにお嫁さんねずみ、孫、ひこ、やしゃ子ねずみまで何万何千という仲間が残らずぞろぞろ、ぞろぞろ、まっ黒になって、猫の陣取っている横町の原に向かって攻めていきました。

猫の方も、「そら来た。」というなり、三毛猫、虎猫、黒猫、白猫、ぶち猫、きじ猫、どろぼう猫やのら猫ま

で、これも一門残らず牙をとぎそろえて向かっていきました。

両方西と東に分かれてにらみ合って、今にも飛びかかろう、食いかかろうと、すきをねらっているところへ、ひょっこりお寺の和尚さんが、話を聞いて仲裁にやって来ました。和尚さんは猫の陣とねずみの陣のまん中につっ立って、両手をひろげて、

「まあ、まあ、待て。」

と言いますと、猛りきっていた猫の軍もねずみの軍も、おとなしくなって、和尚さんの顔を見ました。

和尚さんはまずねずみの軍に向かって、

「これ、これ、お前たちがいくら死にもの狂いになったところで、猫にかなうものではない。一ぴき残らず食い殺されて、この野原の土になってしまう。わたしはそれを見るのがかわいそうだ。だからお前たちもこれから心を入れかえて分相応に、人の捨てた食べ物の残りや、俵からこぼれたお米や豆を拾って、命をつなぐことにしてはどうだ。そして人のめいわくになるような悪いいたずらをきれいにやめれば、わたしは猫にそういって、もうこれからお前たちをとらないようにしてやろう。」

こういうとねずみたちは喜んで、

「もう決して悪いことはいたしませんから、猫にわたくしどもをとらないようにおっしゃって下さいまし。」

と言いました。

「よしよし、その代わりお前たちがまた悪さをはじめたら、すぐに猫に言ってとらせるが、いいか。」

と和尚さんが念を押しますと、

「ええ、ええ。よろしゅうございますとも。」

と、ねずみたちはきっぱりと答えました。

そこで和尚さんはふり返って、こんどは猫に向かって言いました。

「これ、これ、お前たちもせっかくねずみたちがああ

言うものだから、こんどはこれでがまんして、この先もうねずみをいじめないようにしておくれ。その代わりまた、ねずみが悪さをはじめたら、いつでも見つけ次第食い殺してもかまわない。どうだね、それで承知してくれるか。」

「よろしゅうございます。ねずみが悪ささえしなければ、わたくしどももがまんして、あわび貝でかつ節のごはんや汁かけ飯を食べて満足しています。」

こう猫たちが声をそろえて言いますと、和尚さんも満足らしく、にこにこ笑って、

「さあ、それでやっと安心した。ねずみは猫にはかな

わないし、猫はやはり犬にはかなわない。上には上の強いものがあって、ここでどちらが勝ったところで、それだけでもう世の中に何もこわいものがなくなるわけではないし、世の中が自由になるものでもない。まあ、お互いに自分の生まれついた身分に満足して、獣は獣同士、鳥は鳥同士、人間は人間同士、仲よく暮らすほどいいことはないのだ。そのどうりが分かったら、さあ、みんなおとなしくお帰り、お帰り。」

「どうもありがとうございました。これからはもう咎のないねずみを取ることは、やめましょう。」

「そうです。わたくしどもも、けっしてよけいな人の

物を取ったりなんかいたしません。」

猫とねずみは口々にこう言って、和尚さんにおじぎをして、ぞろぞろ帰っていきました。

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社
　1983（昭和58）年5月10日第1刷発行
　1992（平成4）年4月20日第14刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年8月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。